

基幹業務の全体最適を進めるためのERPは多くの企業で導入されているが、多くの機能が内包されているだけに自社の業務に合わせたカスタマイズが重なり複雑化してしまっているケースも少なくない。そんなERPのリプレースに向けては、周辺業務で利用するSaaSとの連携も含めて、今の時代にマッチしたモダナイゼーションされた環境整備を進めたいところだが、そのためにはどんな観点に留意すべきなのだろうか。ERPを新たに整備する際に陥りやすい落とし穴をしっかりと押さえたうえで、後悔しないERP再構築の勘所に迫りたい。

ERPにまつわるトレンド

すでにSAPのような大規模なものをはじめ、会計や生産管理、販売管理といった基幹業務を中心に運用する業務システムまで、多くの企業がERPを導入していることだろう。そんな統合基幹業務システムとしてのERPだが、自社の業務環境に応じてカスタマイズやアドオンを繰り返した結果、確かに使いやすい仕組みにはなっているものの、かなり硬直化した状態になってしまっているケースをよく耳にする。

自社に最適化された環境を使い続けられればよいが、システムは否応なしに老朽化してしまう。また、クラウド環境への移行が進む今の時代にあって、SaaS含めたシステム環境はかつてないほど柔軟性が求められており、新たな環境へリプレースするタイミングを迎えている企業も多いことだろう。

このERPに関してここ数年大きな話題となってきたのが、SAPが提供するERPであるSAP ERP 6.0 (ECC6.0)の標準サポートが2027年末に終了することで混乱をもたらす可能性が指摘されている「2027年問題」だ。当初の期限だった2025年から2年間延長され、改めて2027年問題と呼ばれるようになったことはご存じの方も多いはずだ。SAPを導入している企業では、バージョンアップも含め新たな環境への刷新が必須となり、すでにERP刷新に向けて動き始めている。また、親会社や取引先がSAPを導入している場合でも、SAPに最適化された形で業務システムを構築している側にも影響は大きなものになってくる。SAPを導入していない企業も含め、自社のビジネスにとって注視すべきものとなっている。

SAP以外の話題としては、これまで全体最適化の名のもとにERPに機能を集約(密結合)させることで硬直化を招いてしまった反省から、SaaS含めた利便性の高いサービスを柔軟に組み合わせ、それらを疎結合させることで基幹システムを整備するアプローチが大きなトレンドの1つ。SAP自体も、従来のように自社固有の業務をアドオン開発するのではなく、標準機能でまかなえない周辺業務を個別に開発してAPI連携させるアーキテクチャとしてのSide by Side開発を推奨しており、SAP自体をモダナイゼーションするための拡張開発プラットフォームとしてSAP Business Technology Platform(SAP BTP)を提供しているほど。その意味でも、周辺システム含めERPと柔軟に連携させていく環境整備が、今やERPでは大きなトレンドとなっている。

コンポーザブルERPが必要な背景

そこでERPの新たな形として話題になっているのが、さまざまな機能をコンポーネントとして追加して自社の基幹システムを構築する「コンポーザブルERP」だ。

従来のような業務全般をパッケージ化した統合型のERPとは異なり、コンポーザブルERPは業務にあったモジュールを組み合わせて利用するため、カスタマイズすることなく自社の業務にフィットしたERPとして日々の業務に役立てる。この概念が注目されている背景には、いくつかの要因がある。

●自社の運用に適したカスタマイズで運用保守の負担が大きい

これまでの統合型ERPでの場合、基本的には基幹業務がパッケージとして用意されているため、自社独自の業務に適用させるためには、どうしてもカスタマイズが必要になってくる。カスタマイズを実施するたびにベンダー側に費用が発生するだけでなく、定期的なバージョンアップ時にはカスタイズ部分に留意する必要があり、追加コストが発生したり、バージョンアップ対応が困難になってしまったりすることもある。

そうならないためにも、基本的なコア機能はそのまま維持しながら、独自の機能は拡張開発として別のプラットフォームに実装し、コア機能とデータ連携するようなアプローチが理想的と言える。まさにコンポーザブルERPの概念となってくるわけだ。

●新しい技術がERPベンダーに依存してしまう

最近ではあらゆる業務にAIが適用されるなど、新たな技術を自社の仕組みに適用する機会が増えているが、統合型のERPでは提供するベンダーが新たな技術に適用したソリューションを提供してくれないと自社業務で活用するのが難しい。

機能を個別に組み合わせるコンポーザブルERPでは、外部の各種サービスと柔軟に組み合わせる前提となっているため、例えばAI技術やRPAのような自動化技術、ノーコードツールのような手軽に開発できる外部プラットフォームも柔軟に連携、活用することができるようになる。新たな技術を取り入れやすくなり、結果として多くのメリットを享受できる。

●ビジネス環境の変化に適用できない

市場ニーズの多様化やグローバル化の進展、リモートワーク含めた働き方の変化などビジネス環境はここ数年で大きな変化を見せており、AIやDXなど技術的な進化も加味しながら柔軟なシステム基盤を整備することが求められている。また、戦略的なM&Aで事業を拡大している企業が増えるなか、システム環境には柔軟性が必要不可欠だ。

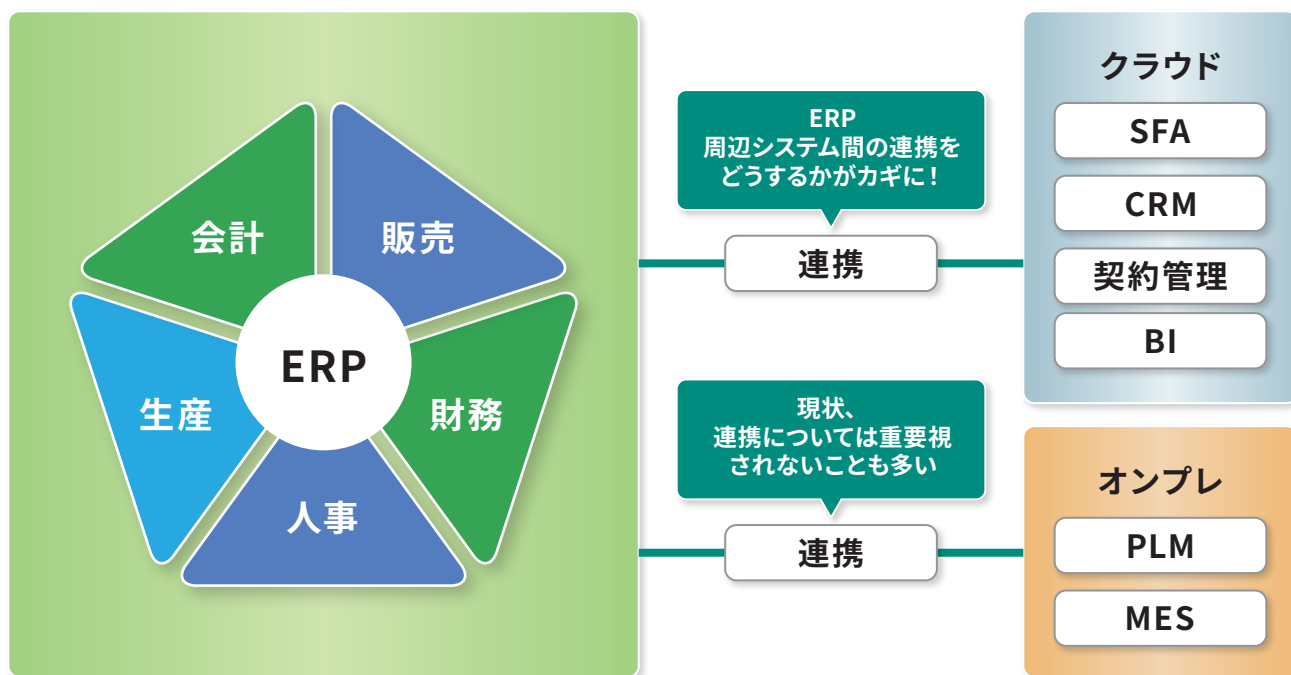
基幹システムとしてのERPにも、当然ながら柔軟性が求められるため、硬直化してしまいがちな統合型ERPよりもコンポーネントを組み合わせるコンポーザブルERPのほうが、環境変化に適用しやすいシステムであることは間違いない。

基幹システムのモダナイゼーションに必要なデータ連携による疎結合

ERP刷新に向けた環境として、コンポーザブルERPが有力な選択肢の1つになってくるが、すべての機能を個別に調達するのが最善とは限らない。既存の統合型ERPでの運用を踏襲したいというケースもあるはずで、パッケージそのものを別のソリューションに切り替えるリスクはできる限り軽減したいはずだ。

ここで重要になってくるのは、システムの柔軟性や俊敏性(アジリティ)を高めるためにも、必要な機能は外部から調達し、うまく組み合わせて自社に最適な環境を整備するという発想を最初から持つておくことだ。また、基幹システムの機能以外にも、SFAやCRMなど情報系のシステムやデータ活用に向けたDWHやBIといったソリューションとともに、オンプレミスの環境で稼働し続けているPLMやMESといった製造現場に欠かせないシステムなどとの連携についても、ERP刷新プロジェクトの重要テーマとして位置づけておきたい。

基幹システムのモダナイゼーション



もしデータ連携に関する優先順位を下げた場合、ERP刷新プロジェクトを進めた場合、後から課題が顕在化してくる可能性がある。

ERPが持つ機能を自社の運用に適応することに時間を割くあまり、時間が足りなくなることで全体のスケジュールに大きな影響を与えかねない。また、連携が十分に検討されていないことで、扱うデータの項目などがシステムごとにサイロ化してしまい、整合性に問題が発生するなど業務プロセスの分断による業務効率の低下も懸念される。

さらに、納期優先のあまり拡張性の乏しい仕組みとなり、結果的に想定外の追加コストが発生する恐れもある。システム間の連携不足で二重入力を強いてしまうなど、ユーザーの満足度低下を招く恐れも出てきてしまうのだ。

【連携の優先度が下がることによるリスク】

〈プロジェクト遅延〉

終盤での時間不足により全体のスケジュールに影響

〈追加コスト発生〉

後から対応するための追加開発費用が発生

〈データ整合性問題〉

システム間のデータ不整合によるビジネス影響

〈業務プロセス分断〉

システム間の連携不足による業務効率の低下

〈ユーザー満足度低下〉

システム間の連携不足によるユーザー体験の悪化

〈拡張性の制限〉

将来的なシステム拡張が困難になる

連携の問題は単なる技術的課題ではなく、 ビジネス全体に影響を及ぼす戦略的な課題です。

これらの課題がより大きなものになることで、本来は業務改善などBPRも含めた新たな環境への刷新が求められていたはずが、単なる既存環境の置き換えになるばかりか、従来よりも非効率な業務プロセスが増えてしまうことも。単なる技術的な問題に留まらず、ビジネス全体に影響を及ぼしてしまうなど戦略的な課題となりかねない。

ERP刷新で後悔しないデータ連携の心得

ERP刷新のプロジェクトを成功させるためには、ERP以外の周辺システムにも十分配慮し、それらを有機的に連携させるための基盤整備が欠かせない。ただし、連携部分をスクラッチで作り込むことは、人的リソースが不足しがちなシステム部門で対応するのは難しいはずで、外部のパートナーにお願いしたとしても、要件定義から実装、システムテストなど多くの工数がかかることで当初の想定よりもコストが膨れ上がることが目に見えている。

そうした事態を防ぐためにも、EAIをはじめとする、システム間を柔軟に連携できるハブとしてのデータ連携基盤を効果的に活用したい。

●データ連携は計画段階から意識、ERPのコア開発と並行実装する

ERPのコア機能の実装を完了させてから周辺システムとの連携を検討する場合、当然ながら想定外の工数やコストがどうしても発生してしまい、プロジェクトそのものの遅延を招く恐れがある。その意味では、計画段階から連携すべきシステムを念頭に置いたうえで、ERPのコア開発と並行しながら連携部分の開発を進めるべきだ。そうすることで、データの不整合などの課題を早期に解消でき、業務プロセスを分断せず二重入力を避けられる。

いずれにせよ、計画当初から周辺システムとのデータ連携の意識を高く持つことが何よりも重要だ。そして、安全かつ確実な連携を可能にするためにも、実績のあるデータ連携ソリューションの導入についても、当初から検討項目に含めておくのはERP刷新プロジェクトを成功に導く1つのポイントと言えるだろう。

●連携に必要な開発工数を可能な限り低減できる環境整備が必要

システム間を柔軟につなぎ合わせるデータ連携について検討する際には、ERPと連携させる先のシステムがどんな環境なのかをしっかりと把握し、その特性を理解しておく必要がある。特に最近では、自社で業務システムを開発するよりも、SaaSを中心に業務環境を整備しているケースが多く見られる。SaaSの場合、サブスクリプションで必要な機能が利用でき、常に最新の技術が適用されて新たな機能も随時追加されていくなど、自社にとっては多くのメリットが享受できることは間違いない。

ただし、SaaSベンダーの都合や世の中のトレンドによって機能拡張や仕様変更が頻繁に行われるため、それらSaaSと連携するデータ連携基盤側でも、環境変化への対応が求められるケースもある。その負担を軽減するためにも、できる限り仕様変更に伴う開発コストを低減できるものを検討しておきたいところだ。最近ではデータ連携基盤に関するノーコードソリューションも多く登場していることから、エンジニアの教育コスト含めて変化に対応しやすい連携基盤であることが重要になってくる。

●質の高いテンプレートがあればうまく活用したい

データ連携においては、当然ながら連携元のERPとSaaS含めた連携先のシステムが存在している。連携部分をEAIのような基盤をベースに最初から設定、開発することはもちろん選択肢の1つだが、できれば提供ベンダーが動作を保証する、質の高いテンプレートを利用するほうが、ERP刷新プロジェクトの負担を軽減することにつながってくる。

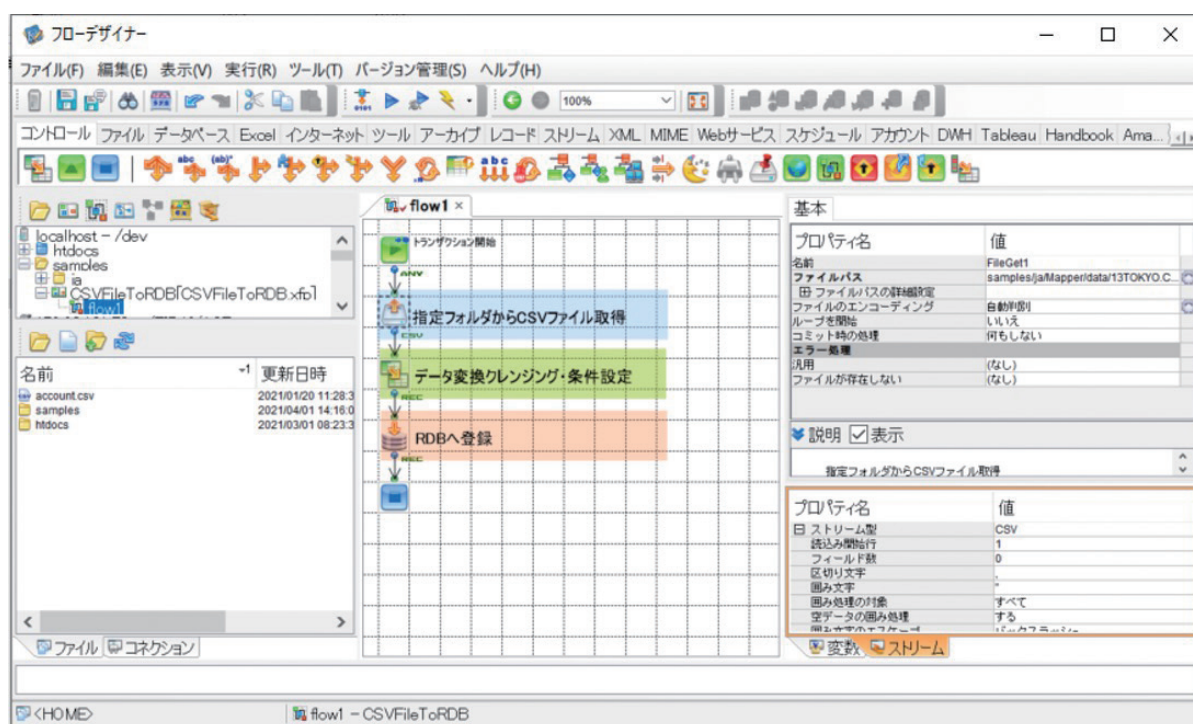
テンプレートを利用することで安全なデータ連携が可能になるだけでなく、仕様が明確なために処理のブラックボックス化を回避することで、将来的に連携領域の改修もしやすくなるメリットがある。エンジニアの人的リソースをERPのコア開発に集中させるという意味でも、データ連携の領域は安全かつ効率的に活用できるテンプレートの活用を検討したい。

データ連携の基盤としてASTERIA Warpが最適なワケ

必要な機能やコンポーネントをつなぎ合わせて基幹業務を運用していくためのERPを整備することの重要性について見てきたが、最適な機能を持ったソリューションをうまく組み合わせて基幹システムを作り上げるためには、どんな環境を整備すべきなのだろうか。その有力な選択肢の1つが、システム間のデータ連携を実現するためのEAIであり、ERP刷新における豊富な実績を持っているASTERIA Warpだ。

●ノーコードで開発ができるデータ連携ツール

ASTERIA Warpは、さまざまな連携先との接続機能をアイコン化した「コンポーネント」をドラッグ&ドロップしてつなぐことで連携プロセスが実装できる、システム同士をノーコードで柔軟に連携できるソリューションだ。コンポーネントを並べて処理の内容と順序を定義し、それぞれの設定項目(プロパティ)を指定するだけで実装できる。短時間でデータ連携フローが実装できるだけでなく、連携時の仕様変更や連携項目の追加といった環境変化が発生しても、迅速に改修でき、メンテナンス性も高いソリューションだ。

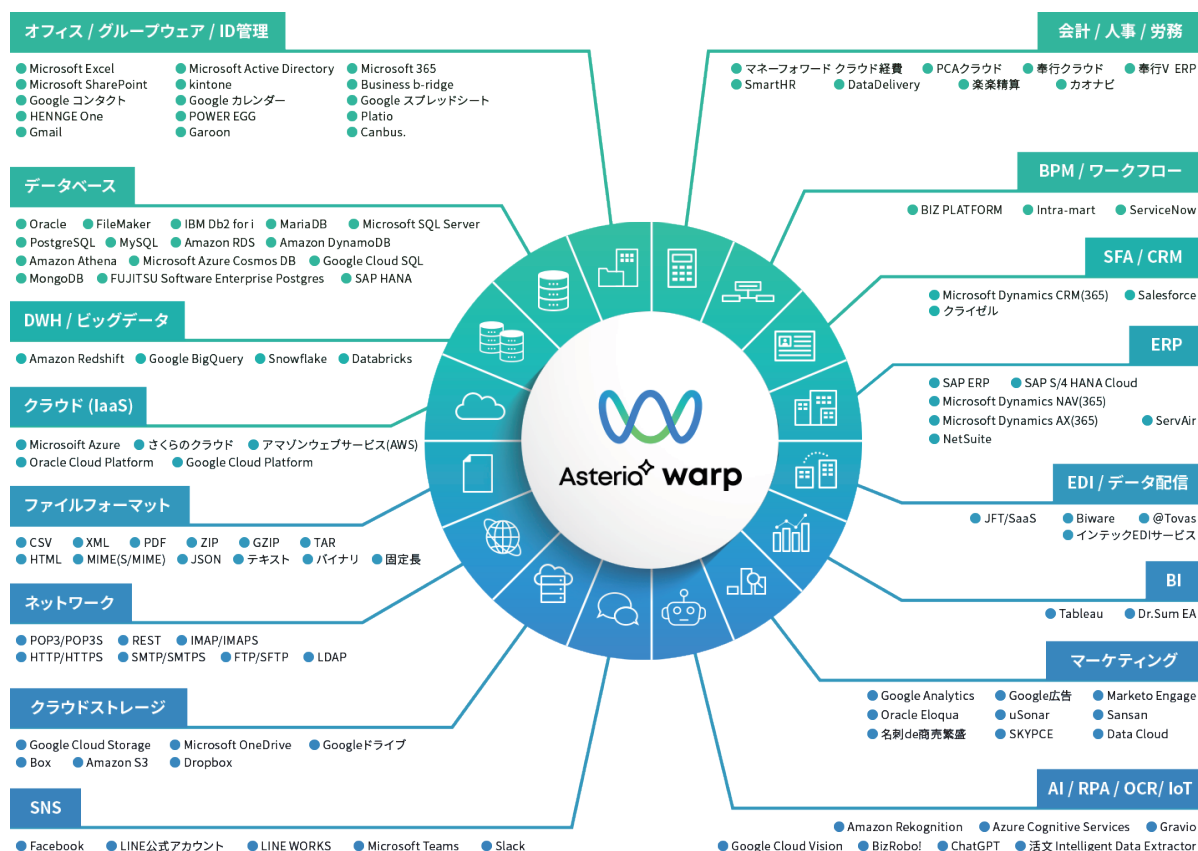


●高い開発生産性

ノーコードで連携フローが実装できるため、エンジニアのスキルに依存することなく拡張性および品質の高いデータ連携が可能になり、処理フローが可視化されていることでメンテナンスも容易になるなど、開発生産性の向上にもつながる点が大きな強みとなる。

特に今回のテーマとなっているERPと連携するアダプターはもちろん、オンプレミス上の業務システムをはじめ、Amazon Web Services(AWS)やMicrosoft Azure、Google Cloud Platform(GCP)といったパブリッククラウド、kintoneなど他のローコード・ノーコードツールとの連携も容易となっており、SalesforceやBoxなどのクラウドサービスやExcelなど日常的に業務で利用しているツールとも柔軟に連携可能な豊富なアダプターを有している。自社が運用する各種サービスとの連携もアダプターが吸収することで、開発効率を大幅に高めることができる。もちろん、人的リソースが不足しがちなエンジニアの負担を軽減し、新人であっても即戦力として活躍できる環境が提供できる点も見逃せない。

より簡単につなぐ100種類以上のアダプター



もちろん、多くのサービスが提供するAPIに対応した各種アダプターを持つASTERIA Warpだが、アダプターが用意されていないサービスであっても、外部向けのAPIが公開されていればREST APIとの連携機能を利用して連携することも難しくない。

ASTERIA Warp導入・活用を支援するパナソニック デジタル

そんなデータ連携ソリューションとしてのASTERIA Warpを活用し、さまざまな顧客に対して実業務に即した活用支援を行っているのが、パナソニック デジタル株式会社だ。ASTERIA Warpのマスターパートナーとして高い販売実績を誇り、連携実績をもとにした豊富なノウハウが大きな武器となっている。

パナソニック デジタルはASTERIA Warpのマスターパートナー

ASTERIA Warp Partner Award

弊社はASTERIA Warpマスターパートナーの内
ASTERIA Warp 販売実績

No.1

- Partner of the Year 受賞 (2015・2016・2019・2023)
- Excellent Partner 受賞 (2013・2020・2021・2024・2025)
- Project Award 受賞 (2020・2021・2025)

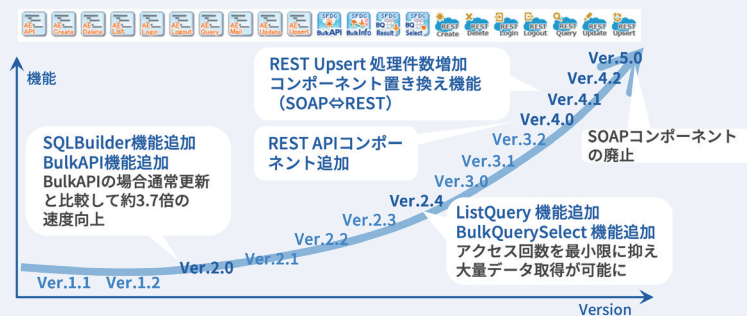


弊社提供ASTERIA Salesforceアダプター導入実績

導入実績

180 社以上

2025年3月末現在



このノウハウを生かしたソリューションとして独自に用意しているのが、EAIテンプレートだ。ASTERIA Warpが持つフローデザイナーでのノーコード開発をさらに進化させたもので、短期間での導入を可能にする実用的なテンプレートにより、標準化による高いメンテナンス性とエラー処理やログ管理など運用共通基盤としての安定した運用を可能にしてくれる。

システム開発における違い(従来型とテンプレート活用型)

 従来型開発	 連携ツール利用	 EAIテンプレート
<p>インターフェース機能・変換機能をスクラッチ開発</p>  <ul style="list-style-type: none"> 各機能個別にコーディング必要で開発生産性は高くない コーディングがバラつき属人化しやすい 	<p>各機能のコンポーネントを並べるノーコード開発</p> <p>コンポーネント 標準/オプション(アダプター)</p>  <p>フロー(データ連携プログラム)</p>  <ul style="list-style-type: none"> 単純な連携は生産性が高いが、エラー処理等は別途考慮が必要 連携数が多い場合、ルール化が必要 	<p>効率的な開発、安定した運用を実現するシステム連携基盤</p> <p>連携テンプレート 過去ナレッジを集約 連携パターンを網羅</p> <p>×</p> <p>運用共通基盤 エラー処理 ログ管理 など</p> <p>×</p> <p>標準化 メンテナンスを容易にする標準化</p> <div style="border: 2px solid red; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> 導入期間を大幅に短縮 実案件を元にした高い実用度 テンプレート利用により自然に標準化 </div>

より高品質・低コスト・短納期

具体的には、データ連携処理を「入力」「変換」「出力」の3層で定義したうえで各層を部品化し、この部品を組み合わせることでテンプレートとして提供する。ASTERIA Warpが持つ標準テンプレートとともに、パナソニック デジタルが提供するEAIテンプレートを活用することで、より高い開発生産性を発揮しながら、最小限のリソースで周辺システムとの安全なデータ連携が可能になるはずだ。

今回はERP刷新に向けた最新トレンドから、環境づくりに欠かせないデータ連携の重要性などについて紹介した。ぜひご興味のある方は、ご相談いただきたい。



国内No.1のノーコードのデータ連携ツール
「ASTERIA Warp」

<https://www.asteria.com/jp/warp/feature/>



「ASTERIA Warp」の機能を厳選
データ連携が”よりカンタン”で、”より使いやすく”進化
ASTERIA Warp Core

https://www.asteria.com/jp/warp_core/

お気軽にお試しください

ASTERIA Warp 無料評価版お申し込み



手ぶらで体験 5日間

まずはどういったものか触ってみたい方はこちら。
準備の手間なくクラウド上ですぐお試しいただける
5日間の無料体験版です。

https://www.asteria.com/jp/contact/asteria/taiken_cloud/



じっくり体験 30日間

ご自身のサーバーにインストールして、現在お使用
のシステムとの連携もじっくりお試しいただける
30日間の無料評価版です。

https://asteria.com/mng/user_input

パナソニック デジタル株式会社

お気軽にお問い合わせください。

<https://service.digital.panasonic.co.jp/contact>

大阪：06-6315-8634

東京：03-5148-5578

アステリア株式会社

ASTERIA Warpについてご不明な点はお気軽にお問い合わせください。

<https://www.asteria.com/jp/contact/entry/>

※本パンフレットに記載された社名および商品名などは、それぞれ各社の商標または登録商標です。